

ロナセン錠

karinomaki

恐れ

私は哲学者でありながら、統合失調症患者です。なんちゃって哲学者です。しかし、私の頭の中で起きていることを分析すれば、いろいろな科学がわかるはずです。

私は、いつも、恐れと戦ってきました、そして、今、私がいちばん恐れているのは精神科医の先生です。私の先生は、大声を出して怒鳴ります。激しい言葉を使います。何回も泣かされました。先生を憎んだことも数えきれないほどあります。死ねばいいのにとしか思えなくて、私も死にたくなりました。しかし、その恐れは、「ロナセン」によるものでした。

激しい憎しみ、そして、激しい情熱は、精神病薬、ロナセン錠によって出現しました。それは、地獄の底を見るような恐怖とともにありました。

先生は知っていた。

先生、先生はご存知でした。自分が、私にとって、恐れの対象にならなければ、ロナセンによって私が破滅することを・・・。

何故なら、私は地獄を見ているから。いつも、見ているから、それにストップをかけるために、自分を、「怖い人間」と私に認識させた。

先生、それがわかったとき、私は心から感動したのです。この文章も、先生が主治医であるから書けるのです。もう、先生への私の感情は、愛を越えました。畏怖の対象となりました。地獄を私が見ていることが、先生にはわかる。先生は、それを越える、抑えるために、ロナセンと、恐怖を用意し、戦えとおっしゃるのです。

妄想との戦い

私の病気は、ジプレキサでしか治らないはずだった。しかし、私の心は、ジプレキサを排除した。先生は、私を生かしながら、ロナセンで、ギリギリの地平に置くことを選び、自ら嫌われる覚悟で私にロナセンを処方し、つらくあたった。

先生、ロナセンがどういうお薬なのか、知識がないのでわかりません。しかし、私の命を保つ、ギリギリの薬です。先生、どうか助けてください。私は苦しい。何故なら、この世と、あの世の境目にいるのです。そこから私が落ちないために。・・・先生は私につらくあたり、死なない強さをつくることを選ばせているのでしょうか。妄想の谷間で、ロナセンが見えます。真っ直ぐに、先生へと向かっている、私の命の薬。

何が書きたいか。

何が書きたいのか、自分でもはっきりしない文章ですみません。統合失調症は、この世界に果てがあることを患者に見せる病気です。そこから治るためには、優れた先生と、いいお薬が必要です。地獄を見続ける私にも、先生が、「恐れ」という境界線を引いて本気で怒ってくれたおかげで、きれいな景色が見え始めました。先生、これからも治して下さい。心からありがとうございます。